

---

# 立派な‘悪の’魔法使い

やまNEKO

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

立派な「悪の」魔法使い

### 【コード】

N9630Y

### 【作者名】

やまNEKO

### 【あらすじ】

自称 魔王から力をもらって世界を俺色に染めてやるZE 実際  
はこんなに元気ではありません

## プロローグ

とある少年がいた……

その少年の魔力、気は至って平

凡だった……

だが知識だけは誰よりもあつた……

一般人が知っている知識から遙か昔に途絶えた知識、神を召還する儀式など彼に知らない物は無いとされた

その少年はある英雄の息子の次男である……

その少年はある日を境

に命を狙われる様になった……

そしてその少年『ジン・スプリングフィールド』は後『立派な、悪の、魔法使い』

その兄『ネギ・ス

プリングフィールド』は『立派な魔法使い』

として語り次がれるのだった。

図書館脱出大作戦（前書き）

ああ文才がほしいorz

## 図書館脱出大作戦

sideジン

「いたぞ!」「捕まえる!」

(ハア、ハア・・・ったく、いったい俺が何をしたって言うんだよ!)

時をさかのぼる事3時間

前・・・

「なあ、ネギ兄さつさとでようぜ。分からない事なら教えてやるから」

俺たちは今王立図書

館の最深部にいる。・・・最深部は魔法学校の教師レベル以上の者しか見れない様な本があり一般人の立ち入りを禁止している様な場所だ。もちろん俺たちが入れる様な場所ではなく見つければ何らかの罰が与えられるのは目に見えているが

「そうよネギ!ジンも教えてくれるって言うてくれているんだし、さつさとと帰るわよ」

こいつの名前

は『アンナ・ユーリエウナ・コロウア』みんなからは『アーニヤ』と呼ばれている女の子だ。

「うん・・・後少し」

そしてこいつが『ネギ・スプリングフィールド』俺の兄だ。  
大人たち曰くネギ、こそが、英雄の息子で俺は邪魔者らしい、つた  
く酷い扱いの差だ

「なあ、

ネギ兄そろそろ見つか」「こおおらあゝ!!」「よし!アーニヤ  
!ネギ兄!逃げんぞ!!!」

「うん・・・大丈夫」このバカ兄が!

ひよい 本を取り上げる音

バタバタ ネギが暴れる音

ベシッ 本で

ネギの頭を叩く音

「いたっ!なにするんだよジン!」

あゝダメ

だな、こいつバカだ。

「今俺達は図書館にいる。」

「うん」

そして今俺達は逃げている。なぜだかわかるか?」

ふるふる ネギが首を横に振る音

「今俺達は館長に見つかってにげているんだよ!」

「ええっ！早く逃げなきゃ」

「分かってる（わよ）！！」

「おお見事にハ

モった。」

そんな訳で現在・・・

「いたぞ

！」「捕まえる！」

（ハア、ハアったく、いったい俺がなにをしたって言うんだよ！） 不法進入です

出口が見えたわよ！」

「でも塞がれているよ」

うわゝ前にも敵、

後ろにも敵・・・完全に囲まれてるな

「ネギ兄、『魔法の射手』使え

「一応使え

るか？」

るけど、一矢だけだよ。」

「よし！それで十分だ！」

「それでどうするの？」

「ああ、『魔法の射手』

「ちょ

を正面にいる兵士の隣の本棚にぶつけてくれ！」

つと！それってまずいんじゃない？」「捕まるのとどっちがいい？」「よし！撃ちなさいネギ」

「う、うん。ラス・テル マ・スキル

マジステル『風の精霊1柱。集い来たりて「敵を射て」魔法の射

手・風の1矢』！」

ドゴン！

「棚が崩れるぞ！」

「にげるー！」「ぎゃあああああー！」  
「よじ。にげるぞ」「……」「……」

いや、俺だってここまでやるつもり

なかつたんだよ。ホントだよ



図書館脱出大作戦（後書き）

テレレレレッレッレ

ジンはレベルアップした

素早さが4アップした

ジンは『強行突破』を覚えた！

ジンの

大人からの好感度が50下がった

好感度 - 450 - 500

どうだったでしょう

か（汗）感想をくれるととても喜びます。どうかお手柔らかにm）

・・・m

教師（前書き）

遅くなりました

かなりの駄作ですがよろしく願います

教師

N O s i d e

「だからお前がネギ君達を  
そそのかして図書館に連れ込んだんだろ！」

ジン・スプリングフィールドは学校の職  
員室にいた。

「俺はそそのかしてもいないし、連れ込んでおいてませ  
ん」

「黙れ！いつまで  
シラを切り続けるつもりだ！」

部屋には10人近い教師と1人  
の子供。普通の子供なら泣きだしそうな威圧感を放ってる。だがジ  
ンはこの威圧感の中大きなため息をつき口を開いた。

「あなた達はなぜ俺がや  
ったと決めつけているんですか？ああ、なるほどネギ君を守るため  
ですか、俺みたいな出来損ないよりも父さんに容姿が似ていて魔力  
も多いネギ君のため。違いますか？さすが大人考える事が違います  
ね。」

その刹那

パン

乾いた破裂音が職員室に響いた

「大人をなめるな！ガキはガキらしく大人に従っていればいいんだよ！」

sideジン

・・・痛い。頬がジンジンする。

ジンは深呼吸をし再び大人達に言い放った

「そこまで言うのなら俺がやったという証拠を持ってこい。もし持つて来れたら責任を取ってこの学校を辞めてやる」

「いいだろ「ただし！」ん？」

「持つて来れなかった場合、今ここに居る教師には全員辞めてもらう」「なっ！」「ここまで言ったんだまさか断るわけないよなあ」

「いいだろう」

教師の一人が余裕のある顔で答えた。

「っしかし！教頭！」

「大丈夫です。私に考えがあります。」

へえ、どうせ口くでもない事だろうがな

「今言った事を忘れるなよ」

「貴様こそ忘れるなよ。」

さて、ネギ兄に注意しとかないと

真っ先に家に帰ろうと心に誓ったジンであった

side 教頭

「あの、教頭、先程の考えとやらは？」

ああそうですね皆さんにも説明してあげないと

「まずはネギ君を呼んで下さい。」

「わかりました。あの、もしかして」

「はい。ナギ様のお名前を使います」

クックック・・・もうすぐ奴がいなくなる

side ネギ

ネギはいつもどおり魔法の練習をしていた

「ジン遅いなあ」

いつもなら5時には帰ってくるのに

コンコン

あつ、ジンが帰ってきたのかな

「失礼、ネギ君はいるかな？」

あれ？学校の先生？

「はい」

ガチャ

ネギがドアを開けると外には2、3人ほどの教師がいた。

「ネギ君、昨日の事で少し話があるので一緒に来てもらえないかい？」

ど、どうしよう。ここは大人しく付いていったほうがいいのかい

「わかりました」

side 教頭

「はい、わかりました。予定どおり「ちらり」で、ではよろしくおねがいします」

クックック、奴が、いなくなる。

初めての  
(前書き)

遅くなりました！

相変わらずの駄文ですが最後まで読んでいただけると幸いです。

後、後半はグロ注意で。



初めての

side 教頭

コンコン

「つれてきました。」

やれやれ、やっときましたか。ネギ君

「失礼します。」

「こんにちは、ネギ君」

「い、こんにちは。」

おや？少々緊張しているようですな。

「リラックスしていいですよ。」

「はい。」

まあ、緊張するなと言っほうが無理ですね。  
では本題に入りましょうか。

「さて、ネギ君今日はなぜ呼ばれたかわかりますか？」

「えっと、勝手に図書館に入ったからですか？」

さてと、どこから切りだしましょうか。

「その通りです。ところで出入り口付近で撃たれた『魔法の射手』  
は誰が撃った物ですか？」

「そ、それは、ほ「実は、倒れた棚に潰され怪我した方がいるんで  
すよ。」・・・え？」

フフ・・・もちろん嘘ですけど

おや、離れて見てもわかるぐらい青ざめていますね。  
もう少し追いつめますか。

「実はその方が「実行犯が特定ししだいその者を退学処分に！」と  
申しておられます、私としては本人の意志を尊重したいのですが・  
・・・」

いやあ、今ネギ君が何を考えているのか手に取るようにわかります  
ねえ。

ではそろそろ・・・

「私はネギ君、キミかジン君のどちらかだと思つのですが・・・どうでしょうか、ネギ君？」

「ぼ、ぼくは・・・」

後もう一押しですね。

「とても残念です。私の考えが正しければお二人のどちらかがお父様のような『立派な魔法使い』になれなくなるかもしれないなんて・・・」

「っ！」

「ああ失礼。それでネギ君、どちらが撃つたのですか？」

「・・・。。。。。。じ。。。。。」

「じ？」

「ジンです・・・」

「それでは、ネギ君達を図書館に連れ込んだのも？」

「ジンです・・・」

ニヤリ・・・私の今の表情を表すとこの表現が一番しっくりくるでしょう。

それにしてもなんでしようかこの気持ちは？  
何か胸の奥からこみ上げてくるような・・・

「そうですね・・・非常に残念です。・・・ネギ君、ありがとうございませう。今日はもう帰っていいですよ。」

ああ、やっとわかりました。

この感情こそが――

「はい・・・失礼しました。」

奴がいなくなる事に関しての歓喜なのだ――

ボタン

扉の閉まる音が校長室に響く。

はい？何故教頭であるあなたが校長室にいるのか。ですか？

それは今、校長が出張中にして、しばらくこの学校に戻ってこないから。ですよ

・・・はて？私は一体だれの質問に答えていたのでしょわか。  
ま、まあいいでしょう・・・  
それよりも今は・・・

「しっかりと記録に残しましたか？皆さん」

教頭がその言葉を発すると同時に今までなにもなかった場所から1  
0人程の教師が現れる。

「はい。バツチリです。」

「そうですか。ご苦労様でした。」

さて、準備は万端、後は・・・奴が来るのを待つだけですが、はた  
して奴は生きて再びこの場に現れる事はできるのでしょわか？

N O s i d e

—————ドオオ—————

ネギが教師に呼び出された同時刻、ジン・スプリングフィールドは  
生命の危機に襲われていた。

「クライヴ・グライヴ・グラゴニス！『火の精霊47柱集い来たりて敵を射て魔法の射手連弾・火の47矢』！！」

—————ドゴオオオン—————

ジンが襲われたのは学校を出てすぐだった。

「ゴホッ、ゴホッ、この威力・・・並の術者じゃないな。」

「ほう、この俺の一撃をくらって生きているとは・・・何かの魔法か？いやお前は魔法が使えない出来損ないだったか、ならただ逃げ足が速いだけか。」

男はジンをあざ笑うかの用に言う。  
だがジンはこの言葉を否定する事はできなかった・・・全て事実なのだから

「・・・お前は誰だ？そして何故、俺を狙う」

ジンはわかっていた。こんな事を聞いても時間稼ぎにしかならず、誰も助けに来ないという事が。

「そうだな、冥土の土産という奴か・・・俺は立派な魔法使い、マギステル・マギのグライだ」

「・・・その『立派な魔法使い』様が俺みたいな奴を何故狙う？」

「俺はただこの学校の教頭に頼まれたんだよ。依頼内容は『英雄ナギ・スプリングフィールドの息子、ネギ・スプリングフィールドに悪影響を及ぼす危険性があるジン・スプリングフィールドの抹殺』だ。この依頼はMM元老議員を通して俺にわたった。つまりお前は完全に見捨てられたんだよ、英雄の息子は優れた方だけが入ればいってな」

ジンは既に理解していた。自分が1部をのぞいて周りから見捨てられている事に・・・

「さて、それでは始めるか『魔法の射手・火の8矢』」

「くっ！」

ジンは詠唱が始まったと同時に大きく横にとんだ。

その瞬間ジンのいた場所が消し飛んだ・・・文字通りの意味で消し飛んだのだ。

「これも避けるか。なるほど本能か、仮にもサウザンドマスターの息子だけある。」

sideジン

ありえねえ・・・なんだあの矢の威力は離れていても皮膚が焼ける  
感覚がする

「では、これで止めをさすか。」

奴の雰囲気が変わった・・・

大技を仕掛ける気が

そうわかった瞬間俺は走っていた。体が理解している・・・逃げなければ死ぬ。

「クライヴ・グライヴ・グラゴニス『ものみな焼き尽くす浄北の炎  
破壊の王にして再生の徹よ我が手に宿りて敵を喰らえ紅き焰』！！」

N O s i d e

ジンはグライから数百メートル離れた木に腰掛けていた

「ハア、ハア、ここまで離れた場所なら奴の魔法は届かないだろ・・・  
っ！」



ジンの見た方向にはグライが放った紅き焰が目の中の木々を燃やし  
尽くしながら迫って来ていた。

「くそが！」

ジンはそう叫び再び走りだそうとしたが・・・そこでグライの音が  
響いた

「爆ぜろ」

先程まで迫って来ていた焰はその声を合図に爆発した・・・

sideジン

「ぐっっ！がああああああああああ！！！！」

ぐっ、あつ・・・い      足を焼か・・・れた

「よく、ここまでもったなジン・スプリングフィールド今楽にしてやる」

イヤだ・・・死にたくない

気がつく俺は・・・泣いていた・・・

「無理もない、まだお前は子供だ・・・『魔法の射手・火の1矢』」

あれ・・・右目が熱い、何だ？この目の内側から何かが出てくるよ  
うな感覚は？

ふと奴から放たれた矢を見てみた・・・俺が見た瞬間に消えた？

「なっ!？」

奴が驚いている？

俺は奴を見る

ガシユ!!

何かが決めるような音を聞いた・・・

「がつつつ！！なつ・・・なんだ！その目は！！」

そこには・・・

体の左半身が何かで喰われたかのような跡を残し消滅しているグライがいた・・・

これは・・・俺がやったのか？

次に見た時にはやつは別の生物のようになっていた・・・周りに真っ赤な血と臓器をまき散らして

「やべ・・・ろみる・・・な・ばけ・・・ぼの」

再びなにかがいたソコを見ると真っ赤な血とまき散らされた臓器以外に何もなかった・・・

「あ・・・え・・・これは、俺・・・が？」

そう確かに認識した時には俺は倒れていた・・・

初めての  
(後書き)

何か要望や矛盾、修正点がある場合お知らせください。

感想お待ちしております。

自分の知らないもう一人の自分(前書き)

いつも通りの駄文ですがよろしくおねがいします(汗)

## 自分の知らないもう一人の自分

N O s i d e

ジン・スプリングフィールドは見知らぬ地で倒れていた。

血の様な色の不気味な空、絶えず続く呻き声の様な何か、そして人の骨が足場ギツシリと敷き詰められている大地。  
明らかにこの世のモノとは思えない場所だった。

「・・・ここは？」

「やっと起きたか」

目覚めたジンの目の前には7歳ぐらいの・・・

漆黒の翼を生やした少年がいた。

s i d e ジン

ここは何処だ？いや、それよりもこの見るからに怪しいこの少年は一体・・・

「お前は誰だ？」

「酷いなあ、今までずっと同じ体で生きてきた仲じゃないか・・・」

わからない。コイツは何をいつてるんだ？

コイツと俺が？

意味がわからない。

「まあ、その話は置いて、今は知ってもらわないと。・・・僕のことを」

トンッ

コイツが俺の頭を軽く・・・と言っても大きく仰け反る様な力だが・・・つついた。

「——————っ！！！！！！」

その次の瞬間、大量のナニカが頭の中に入って来るような感覚に襲われ、再び意識を失った・・・

ここは……どこかの雪山？

あれは……父さん？

「ハア、ハア、まさかこんなに強えとは、思ってもいなかったぜ」。

父さんの目の前にアイツがいる？

一体どういう事だ？

「そろそろ諦めてほしいんだけど……なんで人間が僕を狙うの？」

「お前に頼みがあるからだ!!」

「やだ」

「即答かよ！まあお前をぶっ飛ばして無理矢理聞かせてやるよ」

N O s i d e



「出来るものならね」

その言葉を合図にナギ・スプリングフィールドは詠唱を開始した

「『魔法の射手3002矢』!!!」

「無詠唱でその数か・・・やるなねえ人間」

「まだまだ!!!『来れ虚空の雷・薙払え雷の斧』!!!」

「っ!」

「やったか!？」

だが、ナギの連撃をくらったはずの少年は無傷だった・・・

「その程度で僕に勝とうと思っているの?」

「ちっ!やつぱは無理か・・・ならこれはどうだ?『百重千重と重なりて走れよ稲妻 千の雷』!!!」

・・・今度は少年が右手を前に出すと、ナギの知りうる限りの最強の魔法『千の雷』を跳ね返した・・・さらに威力を上乗せして。

「……は？……ぎゃあああああああ！……！」

「だから、諦めろって言ったのに……」

少年は黒コゲになったナギを置いて山の中へ去っていった……

sideジン

(アイツってあんなに強かったんだ……)

「……彼、ナギは何度も何度も戦いを挑んできた……次は僕にナギが仲間と一緒に挑んできたところにつづるよ……」

(お前何処にいたんだ?)

「……キミの頭に直接語りかけているだけだから此処にはいないよ……」

sideジン

「なあナギ、このチンチクリンな餓鬼がお前がどうやっても勝てない奴なのか?」

(今度は……何処かの宮殿?)

「ああ・・・見かけに騙されるなよジャック！」

「はっ！この最強コンビが揃ってるんだ、負ける訳ねえだろナギ！」

「だれだ？あのオッサンは？」

「ちげえねえ！始めから全力でいくぞジャック！！！」

「おう！！！」

「仲間が増やそうが同じなのに・・・」

（随分と余裕なんだな？）

「―――当時の僕にとっては遊び相手に等しい奴等だったからね―――」

N O s i d e

「行くぞ！魔法の射手9998矢！」

「いくぜ！！」来れ（アデアット）千の顔を持つ英雄』！！さっそ

く行くぜ斬艦剣！！！」

ブオン！

ラカンが己のアーティファクトを召還すると同時に……ブン投げていた……

「へえ、めずらしいアーティファクトだね。でも無駄だよ……」  
我は一对の補食者、我が力を汝へ示せ・全てを喰らえ！奪え！喰魂<sup>イートソウル</sup>！  
！」

少年が詠唱(?)を唱えると右目に巨大な結界が広がり、目の前まで迫ってきていた無数の矢と戦艦の様な大きさの剣が吸い込まれるように消えていった……

「「なっ！！」」

「テメエ！一体何しやがった！クソっ俺様のカードが死んでやがる」

「どうなってるんだよ！『魔法の射手』が撃てねえ！！」

「「「どういう事だ！！！」」

「たださっきの技を完全に奪い喰らったただだよ、さっそく試してみようか……」  
来れ(アダアット)……千の顔を持つ魔王』？」

「なっ！それは俺のアーティファクト！！返しやがれ！と言っかな

んだその不気味な剣は!？」

少年が召還した剣には全て不気味なエフェクトを纏っており見たものが皆引く様なドク口の装飾をしていた・・・

「じゃあ行くよ、斬艦剣」

「へ?ちよつとまって!気合い防御!!!」

ドゴオオン

ラカンが少年が投げた巨大な剣を両手で防いでいた・・・

「俺を忘れてもらっちゃあ困るぜ!!!」  
「来れ雷精風の精!雷を纏いて吹きすさべ、南洋の嵐・雷の暴風」!!!  
「固定」!!!」

ナギは自分で放った『雷の暴風』を拳に纏わせ少年を殴りかかろうとしていた。

「・・・そんな大技を使って無傷で済まないんじゃないのかい?」

「ああ、一度使うとしばらく使えなくなる大技だ!!!」

「へえ、なら相応の物で返させてもらおうよ。」

少年の手は全てを取り込むような純粋な黒いオーラを放っていた。

「俺もいくぜナギ！『ラカンインパクトオオオ』！！！！」

そして少年はそれに向かいつつ

ドゴオオオン！！！！

sideジン

なんだ、あのレベルの戦闘は・・・全くついていけない。  
は？何だあの跡は？

三人の攻撃の余波の土煙が晴れると・・・そこには直径数キロメートルのクレーターができていた。

(なあ、お前は一体何なんだ)

—————

side少年？

あの人間達は何処にいった？  
もう死んだか？

「ゴホッ、どうなった？」

そこか

ガシッ

「ん？」

「捕まえたぜ！ナギ！！！」

「よくやった！ジャック『六之の星と五之の星よ悪しき靈に封印を・  
封魔の瓶』！！！」

ああ、油断したな・・・

「やったな！ナギ！」

「ああ！サンキュージャック！」

sideジン

(おい！お前封印されたのか？)

——まあね。でもすぐに解放されたよ——

(そうか・・・)

俺は気づいたら先ほどの地にいた・・・

「さて、何か質問はあるかい？」

質問？そんなもん数えきれないぐらいあるに決まってるだろ。

「まず一つ、お前は結局何なんだ？」

これは必ず聞いとかなないといけないことだ。

「ああ、僕は当時の悪魔を抑える悪魔の王『魔王』だね。」



魔王ね・・・

「ならお前は何故人間界にいたんだ？」

「ごめん、数千年の長い時間の中ずっとこの世界にいたから忘れてしまったよ。」

数千年とはどういう事だ？

「父さんが生きていた時にお前はまだここにはいなかった・・・数千年とはどういうことだ？」

「ああ、どうやらこの空間は外での一日を一年分にする事が出来るようだよ。」

ダイオラマ魔法球のようなものか・・・

「二つ、この不思議空間はなんだ？」

「ここはキミの深層心理だね。僕はそこに入れられた。」

「三つ、どうして父さんはお前を俺の中に再封印した？」

これだ・・・これが一番気になる事だ。

「それは見せることは出来ないけどそれでもいい?」

「ああ」

「あの人間は、たしかキミを守るためって言っていたね。」

「守る?それならネギ兄でもよかったんじゃないのか?」

「あの人間はキミには魔法が使えないのを知っていたようだったね」

俺が魔法を使えないのをしっていた?なんで父さんはその事を・・・

「何故父さんがその事を知っていたのかわかるか?」

「さあ?それは本人に聞いたほうが速いんじゃない?まあ今何処にいるのかは知らないけどね。」

「なら最後だ、お前の力は俺も使えるのか?」

父さんは俺を守るためっていつていた。なら・・・

「愚問だね。キミはもう使ったじゃないか、そしてその力で人を殺した・・・あれ?もしかして忘れてた?」

「あ・・・・・・うつぶ」

気持ち悪い

「ごほっ……うええっ……げ……かはっ……うえっ……ハア、  
ハア……うっ……」

何秒？何分？俺は嘔吐していた。

お……れが人を殺した？

……アイツに言われてから全てを鮮明に思い出していく……

そうだ、俺は人を殺してしまったんだ……

それを確信した時、俺はまた嘔吐していた……

-----  
-----

「大丈夫かい？」

「……大丈夫だ」

全然大丈夫じゃない。今にも罪悪感で押しつぶされそうだ……

「ああ、そろそろキミの体は限界かな？」

「どづいいう意味だ？」

「ただ単純にこの世界にいるのは限界だという事だよ。考えてみな？この世界で一年たっても外では一日しかたっていない・・・つまりその一年で得た知識、力、経験、全てが外の体の一日という中に詰め込まれる。常人だったらその膨大な知識の量に発狂する、その急激な筋力の増加で動けない体になるかもしれない、その一年で溜まった疲労、怪我などで最悪死ぬかもしれない・・・今のキミにはこの世界の一日が限界だって言うことさ。」

ん？俺の体が半透明に・・・

「キミはもうすぐこの世界から消える・・・僕の力の使い方は自然とわかるだろう、あとこれを・・・」

「ん？なんだ？この黒いカードは」

俺が渡されたカードには、目の前のコイツと同じ漆黒の翼を生やして死神のような真っ黒なマントを着、巨大な鎌をもっている・・・俺がいた。

「これは？」

少々引きつった顔で聞くとコイツはケタケタわらいながら

「それは僕とキミの魂の共有でできたパクティオーカードだよ。何故かカードが黒色だけだね・・・」

「そうか・・・そういえばこの世界にはいつでもこれるのか？」

「いや、キミが死にかけた時か、夢の中で強くここへ来たい！って思ったときしかこれないよ。」

だから急にこの力に目覚めたのか・・・

「あつ、そつだ！この言葉をキミに送ろうっ」さようなら、この偽りだらけの平穏な世界。そしてようこそ！この暴力が支配するクソつたれた真実の世界へ』！！」

まるで、どこかから勝手に引用した様なセリフだな・・・

そんな事を考えていると俺は意識を落とした

**自分の知らないもう一人の自分（後書き）**

いきなりですがヒロインのアンケートをしたいと思います。

詳しくは活動報告を見てください m ( ) m

## キャラ設定

名前：ジン・スプリングフィールド

性別：男

容姿：黒髪でナギの髪型に少し似ている

性格：根は優しい。言葉使いはたまに荒くなる。その時の気分となんとかで我が道を進む。

Fate風能力値（【】は覚醒？前）

筋力A+ 【C-】

耐久B+ 【D-】

敏捷A- 【B】

魔力I 【I】

気EX 【A-】

幸運B 【A】

能力

名称 魔王の力

効果 己の生命力を糧にして使用する事ができる。普段は魔王が魔力で代用しているため生命力を必要としない。この力によりおこされる物は全て魔法でも気でもこの世の物でもない。

名称 魔眼・喰魂

イトソウル

効果 見たものの全てを奪い喰らう眼。

喰らった物を手に入れる事が出来、人を喰らえば生命力を魔法を喰らえば魔法（魔力は魔王が代用）を手に入れられる。ラカンのパクティオカードもこれで手にいれた。一見、最強に見えるが自分より強い者を喰おうとすると逆に自分の視力（一時的に）を失う。連続では使用できない。尚、喰われた物の持ち主はそれを使用する事はできない。

名称 ツイキノカマ  
追記之鎌

効果 魔王との魂の共有で手に入れたアーティファクト。自分が口にした能力を鎌に付与する事ができる。最大2つまで。他の物にも付与できるが最大1つまでで同時には使えない。使用すると漆黒の翼が生える。

名称 千の顔を持つ魔王

効果 ラカンのアーティファクトを喰らった時に手に入れたカード。  
名称 千の顔を持つ魔王

効果 ラカンのアーティファクトを喰らった時に手に入れたカード。  
何故か名前と雰囲気、装飾が変わっているが性能に変化は無い。



名前：????（魔王）

性別：男

容姿：不思議な感じのするあどけなさを残している

性格：不明

F a t e 風能力値

筋力：？

耐久：？

敏捷：？

魔力：A

気：？

幸運：？

## キャラ設定 (後書き)

アンケート募集中です。

## 犬のやり方（前書き）

なにかやってしまった感が・・・

一応、次回ぐらいに出てくるかもしれない悪魔襲撃はネギ2才時7才時に変更するので報告しときます。

## 犬のやり方

side 教頭

まったくグライ様はいつたい何をやっているのか。まさかあんな魔法も使えない様な奴に苦戦している？いえ、それは無いでしょう。となると・・・ただ単に遊んでいるだけ、それが一番妥当ですね。フフ・・・連絡が楽しみです。

「教頭、不気味です。」

・・・表情に出ていましたか。

「教頭は居るか」

「どちら様でしょう」

何故!?

「・・・まさかジン君ですか?・・・まあ立ち話も何ですのぞ中へ。」

何故奴が生きている！！

N O s i d e

ピリピリ

今漫画でこの空気を表すならこの言葉が最もふさわしいと言えるであろっ。

しばらくの静寂の後校長室に漂うこの空気を破ったのはジンだった。

「教頭、ついさっき俺は命を狙われた。」

「それはそれは、災難でしたね。」

「・・・それで俺を狙った奴はお前に依頼されたと言っていた・・・間違えはないか？」

「はて？なんのことでしょうか。私が依頼したという証拠があるんですか？」

カチッ

その言葉を聞き終わるとジンはそう言ってくることを予想していた

かの用にポケットから出した録音機のスイッチを入れた。

『俺はただこの学校の教頭に頼まれたんだよ。依頼内容は――  
ジン・スプリングフィールドの抹殺』

カチッ

「これは俺を殺しに来たグライとかいう奴の声だ。それで教頭、  
んのために俺を狙った？」

「……まあいいでしょう。これ以上隠す意味もありませんし。そ  
の前に一つ聞きたいことがあります。」

「なんだ？」

「どうやってあのグライ様から逃げたのですか？私はそれが気にな  
ってしかたないですよ。」

「……」

ジンは少しの沈黙の後、表情を替えずに言い放った。

「俺が殺したよ」

s i d e 教頭

はい？

「今なんと？」

「俺が殺した・・・跡形も無く」

なんとも信じ難い話ですね。

しかしそれなら全て説明がつく・・・グライ様から連絡が来なくなつた事、森付近に巨大な魔力の様な何かが見れた事・・・答えはわかりきっていますが一応聞いてみますか。

「では魔力を持たないあなたがどうやって？」

「・・・教える気はない。」

「でしようね」

「それで？何故だ？」

・・・この威圧感はきついですね。速く終わらしますか。

「フム、やはり教えません。まず第一に私があなたに教える理由がない。それに今あなたはこの学校と全くの無関係者、不法進入で訴える事もできません。」

「俺が無関係とはどういう事だ？」

「まあ、コレを聞けばわかりますよ、約束したのはあなたですしね。連れていきなさい。」

フウ・・・まさか私が冷や汗を流すなんて

まあ、いいでしょう。後は、MMに任せますか。

sideジン

無関係？俺が？確かに俺は奴と約束した、だが何故それをあのタイミングでいった？  
数々の疑問を頭に浮かべながら俺は投げつけられた録音機を再生した。

カチッ

『ーーーーかりますか？』

『はいーーーー』



これは、ネギ兄との会話？・・・まさか

『それでは、ネギ君達を図書館に連れ込んだのも？』

『ジーンです』

グシヤ

俺は気づいたら録音機を握り潰していた。

「あの野郎・・・」

その時の俺は多分、教頭に対し怒りを持っているのでは無くネギ兄・  
・・・ネギに対し怒りを持っているのだと思う。

「クソっ・・・」

重い足で俺は自分の家へ戻っていった。

.....

.....

「ただいま」

俺の家は森の奥にあり先ほどの戦闘で焼けてしまったのではないかと心配だったがどうやら無事なようだ。

「おかえり〜ジンくん」

こいつはエミリア、エミリア・E・アルマディアだ。今の俺に自分から近ずいてきてくれる唯一の信頼できる家族と言ってもいい存在だ。

「あれ？ジンくんなんか元気ない様に見えるけど何かあったの？」

「まあな、ちよつと色々あつて学校退学になつた。」

「な〜んだ、そんな事か。」

そんな事つておい  
とゆうかいつつも思うんだがなんでエミリアはこんなに軽いんだ？

「俺にとってはかなり重要な問題なんだが？」

余談だがエミリアは学校に行っていない。

「だってさ〜ジンくん、冷静に考えてみなよ。ぶっちゃけて言うと学校って行く意味無くない？」

・・・まさか学校の存在から否定するとはな。

まあ、確かにエミリアの言った事は間違っただけ無い気がする、「おい」確かエミリアは行く意味がわからないからやめたっていついたな。あれ？なんで俺は義務でもないのに学校に行っているっていつ！..！」

「いつてえええ！！！」

エミリアの可愛らしいかけ声で放たれたフライパンは俺の頭にダイレクトに当たった。

「いや〜ごめんごめん。ジンくんが全然こっちに気づかなかったからつい。」

「ついじゃねーよ！・・・ハア、なんか今日は疲れた、もう寝るわ。」

「わかったよ。おやすみ」

「そつだ、寝る前に一つ聞いて良いか？」

「なに？ジンくん」

「もし仮にだ、もし仮に俺が人を殺したとしたらエミリアはどうする？」

俺は怖いんだと思う。俺を出来損ないの英雄の息子としてでは無くジンと言う一人の人間として見てくれているコイツが俺の傍から離れる事が。

「急にどつたの？」

「いいから。」

「うーんと・・・別にどうもしないな。だって仮に誰かを殺しちゃったとしてもジンくんはジンくんでしょ、それにジンくんが理由も無く人を殺す訳ないし。だからどうもしない。」

俺は予想外の答えに呆気に取られていた。

「それとジンくん、服についている血の臭いはどつたほうがいいよ。」



俺は何か焼ける音を聞き目覚めた。

「っ！・・・あいつらは此処までやんのかよ！」

家がところどころ破損し焼けていた。

「エミリアっ！どこだ！エミリア！」

「ジンくん！？早く逃げて！」

「エミリア！！」

エミリアの音がする方向へ向かって走ってゆくと、下半身が屋根の一部に埋まり動けそうにないエミリアがいた。

「早く逃げて、ジンくん！」

クソっ！

俺は手の熱さを気にせず燃えてる木をどかさうとした。

『ジン・スプリングフィールド！貴様に殺人の罪が問われている！

抵抗をやめ大人しく出てこい！30秒後に追撃をかける！」

ふざけんなよ！だからってここまでやるか？

「ジンくん！早く！」

「逃げられる訳ねーだろが！！！」

『30秒が経過した！これより我らの正義の元、貴様に追撃を掛ける！全隊！詠唱開始！《魔法の射手》発射！！！」

「やめろおおおおお！！！！！」

ドガガガガッ！！！！

俺の叫びは虚しく全包围から放たれた魔法の射手はこの家に直撃した。

「キャ！！！！！」

ドシン

俺の後ろ・・・エミリアがいた場所から大きな何かが落ちる音が聞こえた。

「エミリア？おい、エミリア？」

そこには・・・先程までエミリアの頭があつた場所には大きな木の柱が倒れていた。

？これはダレがやった？外にいるMMの犬どもか？それを呼んだのは？あの教頭だ。ならこうなった最初の原因は？

ネギ・・・アイツだ。

『《魔法の射手》による追撃を続行する！尚！我々は貴様の生存は問わない！！』

その時、俺は頭の中の何かが切れる音を聞いた気がした。

「『来れ（アダアット）』お前ら全員、皆殺した」



フラフラとした足取りで巨大な鎌と漆黒の翼を持った俺は家を出ていった。

side 部隊長

「こちら北部隊、こちら北部隊、南部隊応答せよ！」

『こちら南部隊、何があった？』

「報告に誤りがあり……！」

『どういう事だ！』

「奴は人間じゃザ……！」

「なにがあった……！」

「隊長！何かはこちらに来ます……！」

「クッ、全勢力で奴を止めろ……！」

sideジン

「能力付与《切断》《障壁貫通》」

ザシユ！

ナニか切った。ナニかかかった。ダレか死んだ。・・・だからどうした？

俺はそんな事を考えながらただ鎌を振り回していた。

コイツが最後の一人？

「まってくれ！！今、見逃してくれたら俺がお前を“立派な魔法使い”に推薦してやる！」

「死ね」

ザシユ

全員を殺してやっと正気に戻る

改めて周りを見回すと辺り一体が更地になっておりそこから中に転が

っている首や地面に染み込んでいる血など異様な光景が広がっていた。

「エミリア・・・」

俺は今は亡き家族の名を呟く・・・

「『暴力が支配するクソつたれた真実の世界』か・・・その通りだな」

俺はとあるバカの台詞をつぶやきながら涙を流し、エミリアの甲いれを始めた・・・

犬のやり方（後書き）

ありがとうございました。

ただ今のアンケートは

明日菜 1票

エヴァ 1票

です。

アンケートは今も募集していますのでよろしくお願いします  
m )  
—— ) m )

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9630y/>

---

立派な‘悪の’魔法使い

2011年12月17日23時54分発行